

オーストラリアの南東部、シドニーから大分水嶺山脈を西に越えたニューサウスウェールズ州の北西部には広大な平原がひろがっている。北西平原とよばれるその土地は、アボリジナルのひとつの集団ガミラロイの領域であった。

森におおわれていたこの平原がヨーロッパ人によって植民されたのは、ボタニー湾に移民第一次船団が到着した一七八八年から数えてわずか五〇年ほど後の、一八三〇年代末のことだった。

森を失うことで得た仕事

入植者は森をきりひらき、まず牧牛を林間に放牧しつつさらに開墾をすすめていった。牧草地がひろがると羊を導入して牧場の経営を展開していく。その間に狩猟採集の場を失ったガミラロイは生活に困窮し病

北西平原はいま夏をむかえた。痛いほど暑い真夏の太陽のもと、さえずるものない綿畑で今日も除草作業がつづいている。

この過酷な労働に従事するのは、モリーの街区から数百メートル離れて設けられた集住地に暮らすガミラロイの子孫たち以外にはいない。「アボリジナルだからできる仕事」と彼らは自嘲的にいう。

作業は早朝の五時三〇分にはじまる。たとえば五〇〇メートル四方の畑で二回目の夏の除草の場合、男女あわせて九人が一時まで休みなく作業を継続する。畦に生えた雑草だけを、綿を傷めずに鋏で取り除き畦のあいだの溝に落としていく。それから軽い昼食と休憩を三〇分ばかりとり、再び二時近くまで作業をつづけていた。この時刻になると取り除いた草を集めて処分し除草をおえる。これ以降は暑くなりすぎて作業ができないからである。

この日は五〇〇メートル四方の畑を時間内に終了できた。労賃は一人一日あたり七〇〜九〇オーストラリアドル（約七〇〇〜一〇〇〇円未満）にすぎない。労働の割には安い賃金だが、モリーの町に住むガミ

綿畑の草取りと湯泉 真夏のオーストラリアから

日本で冬将軍の足音が聞こえてくるころ、南半球のオーストラリアは夏真っ盛り。この時期、朝早くから広大な綿花畑の雑草取りに励むのは先住民ガミラロイの子孫たち。狩猟採集をしていた先祖と違い、森を失った彼らは季節労働者。歴史は流れるが、夏は毎年やってくる



を思い、人口を減少させてしまった。いま、この平原には農牧業生産品の集散地である地方町モリーが位置する。人口一万ほどの小さな町が取り扱う出荷量は、年額で二億オーストラリアドルに達している。その中心をなすのが、いまや小麦と綿花である。とくに一九六〇年代になってから、牧草地や小麦畑の再開墾によって生産量を急増させてきたのが綿花である。繊維が長くて良

質だといふその栽培には、機械化された小麦などとは違って多くの労働量が投下される。綿花栽培も種まきと綿（種実）の収穫は機械化されているが、除草は人手だけが頼りである。かつて除草剤を用いたこともあったが、空気や河川の水などの汚染がひどくてとりやめになった。それに



除草作業をするガミラロイの人たち。話好きの彼らも、このときばかりは黙々と作業に励んでいた

ラロイたちには、綿畑の除草のほかにはこれといって実入りのいい仕事はない。除草チームは年長者が組織し同時に作業のリーダーになる。メンバーのほとんどは親族や近隣の住人である。リーダーは特定の農場とのつながりをもとに仕事をもらい、作業に

あたる。季節が限られたこの仕事をとるには、他のチームとの競争に勝たねばならないのである。
疲れを癒す掛け流しの温泉
仕事を終えると午睡を楽しみ、とくに街区の東南部にある町営の温泉

まつやまとしお
松山利夫
民博 民族文化研究部
専門は文化人類学。オーストラリア先住民研究。近著に『ブラックフェラウェイ オーストラリア先住民アボリジナルの選択』（御茶の水書房）がある。

オーガニックであることは、製品となったコットンに付加価値をもたらすからでもある。

働くのは五時半から一時まで

九月の終わりから一〇月にかけて播いた種が発芽し成長しはじめる一二月は、第一回目の除草の時期である。ついで二回目は夏の乾燥に備えて灌漑をおこなうために、綿畑には再び雑草が生い茂る。それは綿をのみこむほどの勢いである。そのあと状況によってはもういちど除草をして三月の収

で疲れを癒す。この温泉は、北西平原の開拓が軌道にのりはじめた一九世紀末に、牧草地と小麦畑の灌漑用につくられた深さ八五〇メートルの掘り抜き井戸から湧出した。三本のパイプからプールにとうとうと注がれる水温四〇度ほどの文字どおりの掛け流しの温泉は、アボリジナルの季節労働者をはじめとする低所得者層の憩いの場になっている。

しかし、ここがガミラロイたちに解放されたのは、一九六五年以後のことだった。当時、シドニー大学のアボリジナル学生だったチャールズ・パーキンスは、北西平原に点在する地方町を順に訪問し、それぞれの町でのアボリジナル差別を告発する学生の運動を組織した。モリーの町にやってきた彼らは温泉プールをめぐる差別に抗議してピケを張るなどし、警察の排除に抵抗して、ガミラロイたちの利用を町当局に認めさせたのだった。

こうした経緯をもつこの温泉プールは、北西平原に暮らすガミラロイにとつてひとつのシンボリックな存在であり、同時に綿花畑の過酷な労働の疲れを癒してくれる憩いの場でもある。そのプールも季節労働も、この平原を流れた二〇〇年を超える時の産物なのである。

今年もまた北西平原には草取りの季節がやってきた。